

兵庫県道徳副読本 小学校1・2年

こころがつむぐひょうごのきずな

イ
ニ
ろ
は
ば
た
く



こころ はばたく 目次

しゆく川公園	1
長田の町にガオー！ー横山光輝	4
水くみしたよ	7
ゆめをもつてー冲中重雄	8
アサザのさく池ー天満大池	10
ひとつになつた	15
からすのえんどうー森 はな	17
ーまいの絵ー小磯良平	21
どこんじょうだいこんのだいちゃん	24
生まれかわるけしきー淡路夢舞台	28
ありがとう	34
おじいちゃんのふえー三木市小林のししまい	36
わたしのシロ	40
たんばやきのふるさと	43
つながるいのちー朝来市糸井の大カツラ	47
ささべざくらー笹部新太郎	50

しゆく川公園

「公園に 行つて くる。」

たけしは 家を出て 走りました。近じよの しゆく川公園には よくあそびに 行きます。

「あれ？まなじい、何 してるん。」

公園の さくらなみ木で、まなちゃんの おじいちゃんを 見つけた たけしが 声を かけました。おじいちゃんは 細い 木の まわりに 四角い かこいを つくつて いました。

「おお、たけしか。さくらの なえ木を うえたんや。ねが しつかり つくまでは、木が たおれないように ささえを したり、土を ふまないように かこいを してるんや。」

まなちゃんの おじいちゃんが えがおで 答えました。

「なんで 土を ふんだら あかんの。」

ふしぎに 思った たけしが たずねました。

「土が ふまれると かたく なるやる。かたく になると ねっこが きゆうくつに なって、こきゆうが できなく なるんや。」

「へえ。さくらも こきゆうするんや。」

たけしは 目を ぱちくり させました。

「さくらも 生きて いるんやで。年も とるし びょう気にも なる。人間と 同じ や。」

「木も びょう気になるの。」

「びょう気になったら 木の おいしやさんに みて もらって、手当てするんやで。」

「えっ、木にも おいしやさんが いるの。」

「そうや。でもな、びょう気にならんように、水やり したり、ひりょうを入れたり するんやで。なえ木だけじゃなくて、年をとった さくらも

元気に してるかを 毎日 見てまわって、みんなで せ話を してるんや。」

おじいちゃんは、なえ木を なでながら 言いました。

「この一本の なえ木が 大きく なるには、人の 一生に 近い 時間がかかるんやで。」

たけしは じっと なえ木を 見つめながら、今年の 春、家ぞくで お花見に 来た ときの きれいな さくらの 花を 思い出していました。

「そうやったんや。」

この木が 大きく なって いくのを そうぞうしながら たけしは 晴れわたった 空を 見上げました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

長田の 町に ガオー！
横山光輝

「うわあつ。かつこええ！」

たろうくんは、わかまつこうえんに そびえ立つ 大きな ロボットを 見上げて 思わず 声を あげました。

たくさんの 人たちが 校しゃ 四かいの 高さ ほども ある ロボットと同じ ポーズを とりながら、しゃしんを とっています。

「どうや、かつこええやる。」

ロボットを 見上げている たろうくんにおじさんが 声を かけてきました。

「これはな、てつ人二十八ごう いうんや。リモコン そうさで 空を とんで わるい ロボットと たたかってたんやで。」
「うわあ、すごい。」

「横山光輝さんって　いう、神戸で　生まれた　ゆう名な　人が　かいた　ま
んがの　お話　やけどな。」

「なんや。おっちゃん　びっくり　させんといてよ。でも、なんで　こんな　で
つかい　てつ人を　この　こうえんに　つくったんやろ。」

「はんしん・あわじ大しんさいって　知ってるか。」

「うん。ぼくは　まだ　生まれて　なかつたけど、ぼくの　家も、町も　たい
へんやつたつて。」

「そうやねん。でも、　みんなで　力を　あわせて、自分たちの　町を　ふっ
かつ　させたんやで。もっと　もっと　長田の　町を　元気に　しよう
がんばったんや。どんな　ことにも　まけへんで、長田の　町が　すきやね
ん　という　思いを　こめて　つくったんや。」

おじさんは　話しながら　てつ人の　ように　げんこつを　高く　つき上
げました。

たろうくんは、力強く 話す おじさんが、てつ人の ように かつこよく 思えて きました。そして また てつ人を 見上げました。なんだか とて も ゆうきが わいてきました。

「ぼくも、てつ人に なりたいな。」

「おっ、そうか！たのむで、み来の てつ人くん。」

おじさんは うれしそうに たろうくんの かたを ポンと たたきました。 た。

「ガオー！」

たろうくんも 空に 手を つき上げて 大きな 声で さげびました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

水くみ したよ

地しんで 水道かんが やぶれて、だいどころや おふる、トイレの 水が
出ないよ。

地しんが あつてから、二か月 たつけど、まだ、家の 水道が つかえな
いよ。それで 家の 近くに みんなで つかう 水道が つけられたんだ。
でも、ぼくの 家は マンションの 八かい。水を くみに、かいだんを 下
まで おりなければ ならないんだよ。

お母さんは、大きな バケツを もって、何ども 水くみに 行ってるよ。
いっしょうけんめい がんばって いる お母さん。

ぼくも、ペットボトルを もって 水くみに 行つたよ。

ゆめを もって 冲中重雄

朝から 雨が パラパラと ふって いました。けれども、ぼくは 町たん
けんに 行きました。

地いきの おばさんが じん社の せつ明をして くれました。じん社の
よこには 大きな 石が あります。なんだろうと ぼくが 石に 書かれて
いる 字を 見て いると、おばさんが、

「夢(ゆめ)と 書いて あるんやで。」
と教えて くれました。

ゆめと 聞いて ぼくは 大すきな サッカーが うかびました。

「この 字を 書いた 冲中重雄先生はな、おいしゃさんに なって、人の
やくに 立ちたいと 一生けんめい べん強した 人なんや。」

ぼくは サッカーチームに 入って います。でも、ドリブルや シュート
が なかなか うまく できない ことを 思い出し、下を むいてしまいま
した。

「どないしたん。沖中先生は、 つらい ことや うまく いかへん ことが
たくさん あったんやって。でも、 毎日 がんばったんやって。がんばる
ことが ゆめを かなえる ことに つながったんやね。」

「がんばる ことか。」

「ぼくが 言うとおばさんは にこにこしながら

「ゆめって すてきやね。」

と 言いました。

「そうか、ゆめか。」

空を 見上げると、きれいな にじが かかっていた。

アサザの さく 池 天満大池

「わあ、きれい。アサザのかぶをもって帰ろうよ。」

天満大池のほとりを お母さんと さん歩いて いた かずち
やは、水べの あちこちに さいて いる アサザの花を見
て、うれしく なりました。

アサザは、夏になると きゅうりの 花に にた 黄色い 花
を さかせます。水に うかんで 元気に さいて いる この
花が、かずちゃんも お母さんも 大すきでした。

アサザが よく 見える ところまで 来た とき、お母さんが
立ち止まり、

「かず、かぶを もって 帰ったり したら だめよ。」
と、言いました。

「どうして？」

かずちゃんは、お母さんに 聞きました。

「この 池に とって アサザは 大切な ものなのよ。じつはね、
この 池から アサザが きえた ことが あるの。」

かずちゃんは、おどろきました。

「アサザが きえちゃったの？」

「その ころね、この 池を なおす 工じが はじまって、池の
水が よごれて しまったそうよ。十年の 間に、アサザは ど

んどん へって 行って、この 池から きえて しまっただ
つて。」

かずちゃんは びつくりして、

「どうして 今は いっぱい さいて いるの。」
と、聞きました。

すると、お母さんは

「それはね、この 池に もう一ど アサザの 花を さかせたい
と 考えた 人が たくさん いたから なのよ。その 人たち
が アサザを さがして、何年も あちこちの 池を 歩き回っ
たんですって。そして、ようやく アサザを 見つけたのよ。」
と、教えて くれました。

「でも アサザは きれいな 水じゃないと 生きて いけないで
しよ。だから、天満大池に アサザの 花を さかせたいと ね
がう 人たちが、みんなで 力を 合わせて、水べを きれいに
したり、アサザの なえを うえたり して、大切に そだてて
きたの。たくさんの 人たちが アサザを まもってきたから、
今年も 黄色い 花を いっぱい さかせた アサザを 見る
ことが できるのよ。」
と、お母さんは 言いました。

「そうだったのかあ。」
かずちゃんは、池 いっぱいに、黄色い 花を きらきら かが
やかせて うかんでいる アサザを、もう一ど 見ました。

「本当にきれいだね。」
お母さんとかずちゃんは、声をそろえて言いました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

ひとつになつた

二日目の 夜
ふたりに 一この
おにぎりが
くばられた
韓国の 人も
ベトナムの 人も
いっしょに
わけて
食べたよ

うすい もうふが
ひとりに 一まい
くばられた
さむい夜は
外で ねると
しんまで
ひえるから
せなかと
せなかで
もたれあつて
ねたよ

韓国の

おじやを

もらったよ

ほかほかで

体じゅうが

ぬくもつたよ

心と心が

ひとつになつたよ

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

からすのえんどう 森 はな

山に かこまれた ひょうごけんの たじまに 森はなは 生まれました。大きく なって、学校の 先生を しながら、子どもの ための どう話を 書いた 人です。これは、はなが まだ 小さい ころの お話 です。

はなは、たんぽぽの わたげを とばしたり、からすのえんどうの ふえを ふいたり するのが 大すきです。

学校の 帰り道の ことでした。

近じよに すんで いる まさとが、はなの ふいて いた からすのえんどうの ふえを とって おいこして いきました。

気もちよく ふえを ふいていた はなは、顔を くしゃくしゃに して まさとを おいかけました。

しかし、まさととは 足が はやく、はなは おいつけません。

はなは、なきながら 家に 帰りました。

お母さんは、はなの あとを ついて きた まさとを 見て、

「ほら、まさとちゃんが こつちを 見とんなる。あんたが なきやんだら、
帰るでな。ええかげん なきやみねえ。」

と、はなに 言つて 聞かせます。

はなは 首を ふつて いやいやを しました。

まさとは もじもじして いましたが、近よつて きて はなの 手に 何
かを にぎらせ、ぺこりと おじぎをして 帰つて いきました。

お母さんは、

「はな、もう なきやみねえ。いつまでも ないとつたら、なかした 子が わ
るい こと したと 心 いためとる。」

と、 なきつづける はなの 頭を なでました。

「わるいのは、まさとちゃんなのに。」

そう 思うと、はなは なみだが 止まりません。

やっと なきやんだ はなは、にぎりしめて いた 手を ひらきました。
手のひらには、さつき はなが ふいて いた ふえと、もう一つ まさとが
つくった ふえが なかよく ならんで いました。

はなは、ふえを そつと 口に あてて ふいて みました。

「ピーツ、ピーツ。」

と、すんだ 音が あたりに ひびきました。

ふえを ふいて いると、なんだか 気もちが すうつと して きました。

つぎの 日の 朝、 学校へ 通う しゅう合場しよに つくと、下を む
いて いる まさとが います。 はなは、まさとの そばに 行くと、だまっ
たまま ぎゅつと にぎりしめて いた 手を ひらきました。

はなの 手のひらに なかよく ならんだ からすのえんどうが 一つ。
「ごめんな。」

今どは、まさとが 顔を くしゃくしゃに しました。
学校までの 道は、小さな もも色の 花を つけた からすのえんどうが
風に ゆれて いました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

一まいの絵 小磯良平

まさおくんは、町たんけんで、こいそきねんびじゅつかんへ 見学に やつて きました。

手さげかばんには、朝 早くから お母さんが 作って くれた おべん当が入って います。

まさおくんも 一生けんめい てつだいました。

大きな へやの 中に たくさんの 絵が かざられて いました。

「あつ。」

まさおくんは 一まいの 絵に 近づきました。家に ある 本で 見たことのある 絵を 見つけたからです。

「この 絵が 気になるの？」

立ち止って いる まさおくんに びじゅつかんの 人が 声を かけました。

「お父さんが すきな 絵なんだよ。見て いると 気もちが あたたくくなるんだって。」

まさおくんは 答えました。

すると、びじゅつかんの 人は、

「この 絵を かいたのは、こいそ りょうへいさんという 人でね。こいそさんは、大すきな 自分の 二人の 子どもを この 絵で えがいたんですよ。」

と、せつ明して くれました。

「えっ、そうなの……。自分の 子どもを かいたの。」

「こいそさんは、大すきな 子どもや 家ぞくの ことを 大切に 大切に 思って、この 絵を かいたんでしょね。」

まさおくんは、やさしい お父さんや お母さんの えがおを 思い出しな
がら 手さげかばんを そつと あけて、黄色い ハンカチに つつまれた
おべん当を 見ました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

どこんじょうだいこんの 大ちゃん

「あつ、だいこん。」

「ほんとだ。こんな ところに だいこんが はえてる。」

「さやかと ゆうじは 学校へ 行く と中、歩道の かたい アスファルトを つきやぶって 顔を 出して いる だいこんを 見つけて、びっくりしました。」

「だいこんに 「大ちゃん」と 名前を つけた 二人は、

「きのうよりも、大ちゃん 大きく なったね。」

「はっぱの 数も ふえて いるよ。」

と、毎日 かんさつするのが 楽しく なりました。

びょう気で 入いんして、しばらく 学校を 休んで いた さやかは、たくましく そだって いく 大ちゃんを 見る たびに、大ちゃんが

「ぼくも がんばるから、さやかちゃんも 毎日、元気で 学校に 行くんだよ。」

と、はげまして くれて いるような 気が しました。二人は そうだんして、「大ちゃんに やさしく してね」と いう 立てふだを 作って、大ちゃんの そばに おきました。

そのころには、大ちゃんは「どこんじょうだいこんの 大ちゃん」として、すっかり 町の 人気ものになって、大ぜいの 人が 見に 来るようになって いました。

ある 日の こと、二人が 大ちゃんの そばを 通ると、いつもと ようすが ちがいます。大ちゃんが だれかに ね元から おられて しまって、どこにも 見あたらないのです。

「大ちゃんは、どこへ 行って しまったの。」
ゆうじが 言いました。

「毎日、楽しみにして いたのに。」

さやか の 目から なみだが あふれました。

それから、二人は おられた 大ちゃんを 見ないように、少し はなれた ところを 通って、学校に 通いました。

さやかは、学校に いても、家に いても、大ちゃん の ことが 気に なります。

しばらく たって、大ちゃん の 近くまで 来た とき、大ちゃん の まわりを たくさんの 人が かこんで いるのを 見つけました。二人は かけよって、そつと のぞいて みました。すると、おられた 大ちゃんが、元の 場しよに いるでは ありませんか。

おつた 人が もどしたのでしょうか。でも、すっかり しおれて しまっています。

「大ちゃん、だいじょうぶかなあ。」

「また、元気に なるのかしら。」

大ちゃんもどって きましたが、大ちゃんの ようすが 心ばいで ありません。

そのとき、市やくしよのおじさんが やってきて、言いました。

「このままでは、大ちゃんは かれて しまいます。市やくしよで 大切に
そだてて、元気を とりもどします。そのあと、手じゅつを して、大ちゃん
の 子どもたちを いっぱい 作ります。」

二人は、この話を 聞いて、顔を 見合わせて にっこりしました。
「大ちゃん、がんばれ。」

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

生まれかわる けしき 淡路夢舞台

「お母さん、お父さんは もう 出かけとんの？」

日曜日の 朝、いつもより 早く 目が さめた たかしは、お母さんに 聞きました。

「そうよ。公園に 下草かりの ボランティアに 行つとるよ。」

お父さんと キャッチボールを しようと 思って いた たかしは、少し がつかりしました。

お昼ごはんが すんだ あと、お母さんと おばあちゃんと たかしの 三人で 家の 近くの 公園に あそびに 行きました。

お父さんが 下草かりに 来て いる 公園です。ここは、とても ながめ が よいので、遠くからも たくさんの 人が やってきます。海から 気もちの よい 風が ふいて きます。

休けいしよの ベンチに すわって 休んで いた とき、たかしは、一ま
いの しゃしんが かざって あるのを 見つけました。

「あれは、どこの しゃしん？」

と、おばあちゃんに 聞きました。

「ここや。」

「えっ、ここ？ ぜんぜん ちがうやん。」

たかしは おどろきました。

しゃしんは、草も 木も ない 岩だらけの けしきでした。

「ここはな、ずっと むかしは きれいな 森 やったんやけどな、土とり場
になつてから、木の 一本も はえへん 岩だらけの 山に なつてしも
たんや。」

おばあちゃんは、言いました。

今は、花や 木が いっぱいで、公園の 上の方 は 森に なって います。お父さんが 下草かりに 来て いる 森です。ここが、岩だらけの 山 だったなんて、たかしには、しんじられませんでした。

「だれが、そんなこと したん？」

「そりゃ、人間に 決まっとるがな。」

そして、おばあちゃんは、水とうの お茶を ごくりと のむと

「人間が こわして、人間が なおしとんのや。」

と、つづけました。

それを 聞いていた お母さんが、

「今日の 日曜日、公園の ガイドツアーが あるんやけど、来て みようか。

おばあちゃんの 言ってる ことが わかるかもしれなよ。」

と、たかしを さそいました。

たかしは まよいました。来週こそ お父さんと キャッチボールを しようと思つて いたからです。しかし、あの 森にも 少し きょうみが あるので ガイドツアーに さんかする ことに しました。

つぎの 日曜日、公園に 行くと、たくさんの 人が あつまつて いて ガイドの おじさんの 話を 聞いて いました。

「ここは、二十年ほど 前までは、どうぶつも こん虫も すめない 岩だらけの 山でした。雨が ふると、にごった 水が 川や 海に ながれて 海が まつ茶色に なり、魚も とれなく なった そうです。」

「あの しゃしんが その 時のだ。」
と、たかしは 気が つきました。

「岩と 土だけに なつて しまった この場しよを、むかしのように、みどりいっぱいにするために、みんなで 力を 合わせて 木を うえ、森を

そだてる ことに しました。そして、六年 かけて、みどり で いったい
の 山に することが できました。」

「むかしに もどったんだ。」

たかしの 声が 聞こえたのか、ガイドの おじさんは、

「でもな、ほんまに むかしのよう に すっかり 元 に もどすのには、まだ
まだ 何十年も かかるんやで。鳥や どうぶつや 風が はこんで くれ
る たねが めを 出して、長い 時間を かけて 元通りの 山に かせ
って いくんやで。」

と、言いました。

「どうぶつや 風が たねを はこぶの。」

たかしは、びつくりしました。

「どうぶつや 風の 力だけじゃ ない。下草が 生えたままだと、たねに
お日さまが 当たらんやろ。そうすると、せっかく はこばれて きた た
ねから めが 出ないからな。」

たかしは、お父さんが 下草かりの ボランティアを して いる ことを
思い出し、森の 方を見ました。

「一ど こわした 自ぜんを 元に もどすには、たくさんの人 ちえと
力と 時間がひつよう なんやで。」

ガイドさんの 話を 聞いて、たかしは、 おばあちゃんが、本当に 言い
たかった ことが わかったような 気が しました。

たかしは、あせを いっぱい かいて 下草かりを して いる お父さん
の 顔を 思いうかべました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

ありがとう

テントの外では、お姉さんたちが、だいこんや にんじんを 山のように切って、大きな なべに 入れて いきました。

「何を 作って いるのかな。」

ぼくは 何が できるのか 知りたく なって きました。

お姉さんたちは、白い いきを はきながら、いっしょうけんめい 手を うごかして います。テントの 外の 大きな なべから、みそしるの いいにおいが して きました。

へやに もどって、お母さんに 話したら、

「お姉さんは、わたしたちの ために 来て くれた ボランテニアの 人たちよ。さむいのに みんなの ために しょくじを 作って くれて いるのよ。」

と 教えて くれました。

ぼくは、お姉さんたちの 作って くれた あったかい みそしるを、のこ
らず 食べました。

しょつきを かえすとき、ぼくは、大きな 声で、

「ごちそうさま。」
と 言いました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

おじいちゃんの ふえ 三木市 小林のししまい

「ピーヒャラリーロ、ピーヒャラ。」

にぎやかな ふえの音が 公みんかんから 聞えて きます。まつりの れんしゅうが はじまったので、みんな はりきって いるのです。ひろしは、ししまいの ふえを たんとうする ことに なりました。

「ピイッー。ヒャーツ。」

この日も ひろしの よこぶえからは へんな 音しか 出て きません。いくら がんばっても いい 音が 出ないのです。中学生の お兄さんたちの ように じょうずに ふく ことが できない ひろしは、がっかりして 公みんか んを 出ました。

「ピ。ピイッー、ヒャーツ。」

「ああ、あかん。」

家に帰って、また れんしゅうを はじめましたが、やはり、いい音は 出ません。ひろしは なきそうに なりました。

その時、

「どうや。じょうずに なったか？」

ひろしの へやへ おじいちゃんが 入って きました。

「あのな、おじいちゃん。ぼく、なかなか うまく ふけへんねん。そやから、あのな、まつりには 出られへんねん。」

おじいちゃんは、にこにこしながら ひろしの となりに すわりました。手には、ふえが にぎられています。

おじいちゃんは もって きた ふえを ふきはじめました。

「ピーヒャララ、ヒャラリロ、ヒャラリロ。」

「うわあ、おじいちゃん、じょうずやな。すごいやんか。」

ひろしは はじめて 聞く おじいちゃんの ふえの 音に びっくりしました。

「おじいちゃんも ひろしの お父さんも、子どもの ころ ししまいの ふえの れんしゅうを したもんや。だれでも さいしよは へたくそや。そやけど む ずかしい きよくも みんなで ふくと 楽しかったで。」

「おじいちゃん。ぼくも じょうずに ふきたいねん。なあ、いっしよに ふいて。おねがい。」

「わかった、わかった。ひろしの たのみやから しゃあないな。」

「やったあ。」

ひろしは 目を かがやかせて ふえを ふきはじめました。

「ピITTER、ヒヤラヒヤラー、ヒヤラー。」

「おっ、じょうずに ふけるやんか。」

「おじいちゃんと いっしよだとなんだか じょうずに ふけるよ。」

「そうか。よっしゃ、おじいちゃんも、もう一回 ふいたるで。」

おじいちゃんと いっしよに ふくと ふしぎと じょうずに ふけるような 気がします。

「もう一回、もう一回。」

ひろしは んんしゅうが 楽しく なって、何回も ふきました。

「うまなつたな、ひろし。」

「うん、おじいちゃんの おかげや。ありがとう。おまつり、ぜったい 見に 来てな。」

ひろしは、ふえを きゅっと にぎりしめて、えがおの おじいちゃんを 見ました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

わたしの シロ

シロが いません。

赤ちゃんの ときから、ずっと いっしょに くらしていた シロが いません。

わたしが よぶと、すぐに こたえる シロが いません。

けさの 地しんで、こわれた 家から やつこの ことで はい出た わたし。

「シロー。シロー。」

名前を よんでも、へんじを してくれません。

自分で 外へ 出たのかな。

どこかへ にげたのかな。

ひなんしよに むかう 間も、お父さんや お母さんと いっしょに、

「シロー。シロー。」

とよんで みましたが、シロは こたえません。

夜になっても、つぎの日の朝になっても、また、そのつぎの日に なっても、シロが いません。

五日目の朝、みんなで こわれた家の かたづけを しました。

こわれた げんかんの くつばこの 下に、白い ものが 見えました。

「シロだ。」

お父さんも お母さんも わたしも、ぐったり している シロを、いっし

ようけんめい たすけようと しましたが、はしらや かべが おもすぎます。

「シロー。」

きんじよの 人や、通りかかった きゆうじよたいの 人たちも てつだつて くれました。

シロは、たすかりました。

わたしは、けがを している シロを ぎゅっと だきました。

シロは、「クーン、クーン。」と なきながら からだを すりよせて きます。

わたしの なみだは、止まりませんでした。

見ていた 人は、はく手を して いました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

たんばやきの ふるさと

十月の 土曜日、ぼくは お父さんと とうきまつりに 行きました。

お店には、たくさんの おさらや お茶わんが ありました。よく 見ると
どれも 形や 色が ちがいます。

「これは みんな たんばやきと 言って、ここで 作られた ものなんや。
ずっと むかしから つたえられて きとる、日本でも ゆう名な やきも
のなんやで。」

と、 お父さんが 教えて くれました。

ここの お店の やきものは ぜんぶ 篠山市 今田町で つくられた
ものだ と 知り、びつくりしました。ぼくの すんで いる 町の すぐ 近
くだったからです。

ぼくは、一年生の 図工の 時間に ねん土で しっぽが ぎざぎざの きょうりゆうを 作りました。やきものになっ て とどいた 時、とてもうれしかった ことを 思い出して いました。

すると、お店の おじさんが、

「どうや、ぼく。土の かたまりが 人の 手で こう なるんやで。のぼりがまを 知つとるか。長い 土の トンネルの 中で たき木を もやしつづけると こんな 立ばな やきものが できるんやで。」
と 教えて くれました。

「のぼりがま？」

ぼくは のぼりがまを 見て みたく なりました。帰りに お父さんにおねがいして のぼりがまの ある ところに つれて行って もらいました。

道に そつて たんばやきを 作る お店が たくさん あります。

「この お店は かまもとや。かまもとには やきものを やく かまが あ
るんやで。」

お父さんと ぼくは、この かまもとで、のぼりがまを 見せて もらう
ことに しました。

「うわ、すごく、長い！」

かまの 中を のぞきながら、ぼくの きょうりゅうも 火の 力で たん
ばやきに へんしんしたのかと 思いました。

「たんばやきに きょうみを もったみたいやな。うちで 毎日 つかつとる
お茶わんも たんばやきなんやで」

「えっ、ほんま？」

ぼくは なんだか うれしく なりました。

「今どは 立くい すえのさとに 行ってみよか。小学生の とうげい教室が
あつて、自分で 作れるんやで。」

と、お父さんが 言いました。

ぼくは、お店で 見たような やきものを もう一ど 作って みたいと 思いました。

「うん。行って みたい。」

「たんばやきは ふるさとの 自まんや。どんな ものでも ええから 土を こねて 作って 見たら ええわ。」

と、お父さんは 言いました。

ぼくは、お母さんに でき上がった ゆのみを わたしながら たんばやきを 自まんして いる 自分を そうぞうしました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

つながる いのち 朝来市 糸井の大カツラ

わたしたちは、遠足で、糸井の 大カツラの 木を 見に行きました。山の 中を 歩いて いくと、大きな 木が 見えて きました。

「わあ、すごい。大きいな。」

「でっかい 木やなあ。」

木に 近づいて みると、一本の 木では ないことに 気づきました。何本もの 木が あつまって いました。

「なかよく かたを 組んでる みたいやな。」

みんなが、大カツラの 木を 見て おどろいて います。わたしは、「先生、これ、何本くらい あるん？」

と 聞きました。

「八十本くらいかしらね。」

「そんなに たくさん。」

「中に 入って みましようか。」

先生に さそわれ、わたしたちは じゅん番に 木の中に入って みま
した。中は、子どもが 十人くらい 入る ことが できる 広さです。

「わあ、広い。まるで おうち みたい。」

わたしを かこむように 大きな 木が たくさん はえています。

「ひこばえと いうのよ。」

「ひこばえ？」

「そうよ。まん中に 一番 さいしょの 木が あって、それは なくなった
木なのよ。その 木を かこむように めが 出て くるの。それを ひこ
ばえと いうの。もとの 木の えいようを もらって そだって いく
の。」

「リレー みたいやね。」

「そのとおりね。いのちの バトンタッチは 二千年も つづいて いるの。」
「二千年も。すごいなあ。」

わたしは、木の 中から 空を 見上げました。

お日さまに てらされて きらきら 光る はっぱが わたしたちに 話
しかけて いるようでした。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

ささべざくら

笹部新太郎

ある 春の 日、おばあちゃんと お花見に 来た あすかちゃんは、大きくて 太い さくらの みきに 名ふだのような ものが かけて ある ことに 気づきました。

「おばあちゃん、これは さくらの 名前なの。」

「そうよ。ささべざくらと 言ってね。ささべしんたるうさんが、大切に そだてた さくらなのよ。ささべさんは、むかしから ある うつくしい 日本 の さくらを まもって、み来に のこそうと 一生けんめい べん強した 人なのよ。」

「すごいなあ。」

あすかちゃんは たくさんの 花を つけた、 太くて 大きな さくらを見上げました。

「でも、せんそう中には、いろいろと つらい ことも あったんだって。」

足元に おちた 一りんの さくらを ひろい上げながら、おばちゃんが 言いました。

「ささべさんはね、どんなに くるしい時でも、あきらめずに さくらを そだてつづけたのよ。ほうって おいたら なくなつて しまいそうな さくらを まもつて、みんなが 楽しめる 場しよを たくさん 作つて くれたのよ。」
「まった ことも 大へんな ことも いっぱい あつたのにね。」
おばあちゃんは そう言いながら 一りんの さくらを そつと あすかちゃんの 手のひらに のせて くれました。

きれいな さくらを 見てみると、あすかちゃんは どんな 時も あきらめずに さくらを そだてつづけた ささべさんの 気もちが、わかつたよう な 気が しました。

「ささべさん、今年も きれいな お花を 見せて くれて ありがとう。」
顔を 見合わせて につこり ほほえむ 二人の えがおは、春の 光にかがやいて いました。